

稿 完

〔明治三十五年—三十六年 東京美術学校ニ於テ講述 伊太利亞、仏蘭西彫刻史稿 完〕

〔明治三十六年 独逸、英吉利彫刻史稿 完〕

以上六冊は本校における西洋美術史講義のためのノートで、
罫紙に毛筆で記され、所々に朱字や英書からの抜き書きが付さ
れている。

〔以太利建築史 原稿明治三十七年一月綴〕

〔草稿明治三十六年四月〕

〔草稿明治三十七年一月〕

〔原稿明治四十三年七月〕

〔原稿明治四十四年三月〕

〔原稿明治四十五年一月芸苑茶話〕

〔原稿大正三年十月〕

以上七冊は『美術新報』等への掲載用原稿。罫紙に毛筆で記
されている。

〔以太利建築史原稿 完〕

〔以太利彫刻史原稿 完〕

以上二冊は『西洋美術史要 以太利建築之部』（明治四十四年画報社）、
『西洋美術史要 第三編 以太利彫刻之部』（同三十八年同）の原稿で、原稿用紙
に毛筆で記され、図版が添付されている。

手帖

明治四十二年のメモ帖と、大正三年渡欧期のメモ帖各一冊。

台東区立朝倉彫塑館には岩村透旧蔵書約二千部が収蔵されてい

る。大部分は洋書である。これは本校で岩村の薫陶を受け、岩村を
恩師として尊敬していた朝倉文夫が、古本屋から買い戻すなどして
収集し保管したもので、その内容については田辺徹著「朝倉彫塑館
の蔵書」（『朝倉彫塑館の記録』昭和六十一年。財団法人朝倉彫塑館）にお
いて紹介がなされている。

⑥ 鶴田機水死去

本校助教教授鶴田機水（図画師範科日本画授業担当）は大正三年五月
二十八日に病死した。機水は本名幾太郎。明治七年に山梨県東八代
郡石和町に生まれ、同二十八年九月本校に入学。同三十三年日本画
科を卒業して研究科に進み、翌三十四年四月千葉県成田中学校教諭
となったが十月に辞職し、川端玉章、荒木寛畝、山名貫義について
日本画を研究した。同三十六年九月に本校西洋画科に入学。翌三十
七年四月には本校雇（助教）を命ぜられ、三十八年十二月に助教授と
なった。雪舟に心酔する一方、西洋画の技法も研究するなどして研
鑽を続けたが大成する前に死去した。『東京美術学校校友会月報』
第十三巻第二号に屋代鈇三の追悼文と図画師範科錦巷会員、本校生
徒らの追悼文、および機水の肖像写真、スナップ写真等が掲載され
ている。葬儀は谷中天眼寺で五月二十九日に営まれ、郷里の先塋の
側らに葬られた。翌大正四年五月、知友による追善画会が上野松坂
屋で開かれた。これについて『東京美術学校校友会月報』第十四巻
第二号には次のように記されている。

○鶴田機水氏追善畫會 東京美術學校日本畫助教教授にして、雪舟

の畫風を慕ひ、別に一家を成したる故鶴田機水氏の爲めに、氏の知友たりし知名諸氏數十名相謀り、五月十六日より二十日まで、上野公園松坂屋吳服店に於て、故人の遺墨展覽會を開き、猶追善畫會を開きて、知名畫家の畫幅百餘點を陳列して即賣に附し、其収入は總て遺族に贈呈する筈なり。

大正五年十二月には『鶴田機水遺墨帖』（松浦一編集発行）が発行された。

⑦ 神木（森井）健介起用

大正三年六月二日、大沢三之助（同年八月十二日宮内技師に転任）の後任として神木健介が教授に任命された。神木は旧姓森井。神木と改姓し（大正二年）、再び森井姓に戻った（同十二年）。彼は明治四十四年東京帝国大学工科大学建築科を卒業し、大正二年欧米留学。翌三年六月帰国し、本校に起用され、昭和十九年に退官するまで本校建築科の教育に尽力した。

⑧ 小万柳堂鑑藏書畫展覽會

本展覽會については年報もこれに触れているが（前頁）、『東京美術学校校友会月報』第十三卷第三号には非常に詳しい記事があるので左に抜粋する。

小萬柳堂鑑藏書畫展覽會

去る六月六日及び七日の兩日、本校文庫を會場として、支那の藏

幅家廉泉氏所藏書畫の展覽會を開きたり。廉泉氏は上海に近き江蘇省常州無錫の人にして、曾て江蘇舉人として中央政府の官吏となり、陞りて位二品官度支部郎中に至りしが、歳不惑に達すると共に、掛冠して故山に退耕し、専ら思を刊書著作藝術に潛めらる。別業を小萬柳堂と號し、鑒藏の古書畫悉く之れに收藏せりといふ。廉氏聚珍の内容は、古書古畫を始め、銅器磁器玉類等各般の器玩に互り、古畫のみにも一千五百六十點の多數にして、唐宋以來の名蹟は、概ね備はらざるなく、殊に明清諸家に至りては、悉く蒐羅して漏すなしと、而してこの大聚集の一半は、廉氏祖先以來累代積聚したるものにして、他の一半は明末の豪族宮紫玄、及び其子孫相傳へて聚珍に意を用ひ、宮子行宮玉甫兄弟に至りて、前後四十五年間數十萬金を費し、支那十五省を歴遊して廣く搜求し、扇面のみにても千有餘面を得たるものなりといふ。

〔中略。端方著「廉氏小萬柳堂藏畫記」〕

北京駐劄の山座公使、廉氏收藏の豊富なるを聞き、廉君を憐憑して帶同來朝せしめたるを以て、本校に於ては展覽會を開き、本邦藝術界の研究資料に供することとし、廉氏所携の珍什を悉く文庫に於て保管し、文庫閱覽室及び陳列室を會場に充て、左の趣意書を添へて普く朝野藝能の士を、招待したるが、兩日の來觀者凡そ一千五百名の多數に上り、松方侯、徳川（義親）侯、土方伯、平田子、秋元子、末松子、花房子、後藤男、高橋男、牧野男、九鬼男、都築男、近藤男、細川潤次郎男、股野博物館長、矢野龍溪、鎌田慶應義塾長、小牧昌業、下條正雄、田中文學博士、犬養毅、前田文學博士、山本前農相、市村博士、箕作博士等社會各方面の